

平成二十一年度

卒業論文概要

2010年1月提出

遠藤 めぐみ	1
日中戦争期における華北華中における日本の傀儡政権について	
加藤 奈津子	2
賈平凹「鶏窩窪の人家」研究 —映画『野山』と比較して—	
金子 綾乃	3
17世紀の日記から見る両班の葬祭儀式 —忌日と名節の四代奉祀を中心に—	
河合 望	4
韓国高等学校国史教科書の変遷 —第2次教育課程教科書と第3次教育課程教科書の近代以降の記述を中心に—	
木村 歩美	5
哈爾濱日本人居留民社会の成立とその歴史	
齋藤 大志	6
植民地期朝鮮における官僚の試験任用 —文官普通試験の試験制度と最終合格者の分析を中心に—	
佐藤 由香	7
白朗作品研究 —1936年–1940年を中心として—	
佐藤 有美	8
阿城「棋王」について	
志賀 裕子	9
植民地期朝鮮女性雑誌から見る恋愛・結婚観	
新井田 香	10
葉紫研究	
原 里佳子	11
黄炎培の政治的活動について —職業教育活動からの変遷を中心に—	
松本 理沙	12
福島県送出の満州開拓移民	
吉田 衣里	13
北魏における廢仏について —魏収の視点から—	

新潟大学人文学部 地域文化課程

アジア文化履修コース

<http://hyena.human.niigata-u.ac.jp/files/asiac/asia.html>

日中戦争期における華北華中における日本の傀儡政権について

遠藤 めぐみ

1937年から始まった日中全面戦争において、日本は、軍事的作戦を通じて占領地を拡大していった。それとともに、「華をもって華を制する」という方針の下、占領地の治安維持回復のために、占領地に傀儡政権を樹立していった。日中戦争中に中国占領地で成立した日本の傀儡政権は、「察南自治政府」、「晋北自治政府」、「中華民国臨時政府」、「中華民国維新政府」、「中華民国国民政府」（汪精衛政権とする）など、ほかにも多数あるが、本論文では、中国華北・華中地域に着目し、そこで成立した「中華民国臨時政府」および「中華民国維新政府」の成立について検討した。資料としては、アジア歴史資料センター所蔵の資料および『現代史資料』に掲載されている資料を用い、日本がどのような計画をもって中国占領地において傀儡政権樹立工作をおこなっていったのかをみていった。

第一章では、1937年12月14日に華北に成立した「中華民国臨時政府」（行政委員長・王克敏）について、その成立過程を明らかにした。傀儡政権樹立工作は、軍事的作戦とともに北支那方面軍によって進められていたが、その新政権の性質に関して、陸軍中央や日本の出先軍など（関東軍、支那駐屯軍、北支那方面軍）の間で意見の相違が生じていた。それは、新政権を南京国民政府に代わる中央政府として成立させるか、一地方政府として成立させるか、というもので、工作を進めていた北支那方面軍は中央政府とすべきだとしたが、結局は「中華民国臨時政府」は「臨時」という名称のとおり、中央政府としては成立せず、南京国民政府との交渉による戦争の解決の余地を残したものとなった。

第二章では、1938年3月28日に華中で成立した「中華民国維新政府」（行政院長・梁

鴻志）について、その成立過程を明らかにした。新政権の性質に関しては、「中華民国臨時政府」の成立時とは異なり、陸軍中央と北支那方面軍および関東軍は一貫して「地方政権の樹立」を主張し、華中新政権の成立後は「中華民国臨時政府」に速やかに合流するように指示し、工作を進めていた現地軍である中支那方面軍と対立した。名称決定についても、陸軍中央などは地方政権の性質をあらわす名称を提示し、現地案にあった「中華民国新政府」という名称は認められず、華中新政権は「中華民国維新政府」という名称で地方政権として成立した。

以上のように、「中華民国臨時政府」と「中華民国維新政府」は同じ日本の傀儡政権であったが、成立過程には多少の相違が見られた。新政権の性質について、どちらも「中央政権」とすべきか、「地方政権」とすべきかで意見の対立が起こったが、その対立の構造は、異なるものとなっていた。特に、後に成立した「中華民国維新政府」は樹立工作当初から一貫して「地方政権」として成立させるよう方針づけられ、一時的な地方政権という意味合いがとても強かったといえる。

賈平凹「鷄窩窪の人家」研究

—映画『野山』と比較して—

加藤 奈津子

農村出身の作家・賈平凹の作品は、多くが舞台を自分の故郷である陝西省においており、彼の作品は「尋根（ルーツ探し）文学」と位置づけられる。「鷄窩窪の人家」は、1984年第二期の『十月』に掲載された中編小説である。禾禾・麦絨と回回・烟峰の二組の夫婦が暮らしていたが、新しいことを積極的に取り入れる改革的な禾禾・烟峰と、古くからの生活を守る保守的な回回・麦絨とで対立し、それぞれ夫・妻を入れ替える話である。1985年には顔学恕監督により『野山』という題で映画化された。本論文では、小説・映画のポイントとなる部分に注目し、この作品を通して賈平凹が伝えたいことを探った。

第二章では、まず映画化の背景を説明した。監督は「鷄窩窪の人家」を読んで、賈平凹が描く農村のいきいきとした表現、身近な日常生活からの視点、シンプルな文章を絶賛した。小説の特徴を活かし、映画の演出においても自然、真実に出来るだけ近づける努力をしている。

そして、小説と映画とで変えられたところを中心に取り上げ分析した。小説にはなかった場面の追加によって、小説では明るみに出ていなかった登場人物の心情が強調された。また、映画でのラストシーンは小説と違って人間関係を丸く収めておらず、より観客に考えさせるような終わり方に変化している。また、それらを踏まえて主要な登場人物5人の人物像についてまとめた。特に印象的なのが2人の女性である。烟峰は強さや新しい時代を生きる積極性の中に、繊細な女らしさを秘めた魅力的な女性である。麦絨は特に二面性が強く、女性らしい優しい心配りを見せながら、自分から結婚を切り出す等強い面も持っていることがわかった。

「鷄窩窪の人家」は映画化されて、主な登場人物の性格や考え方を強調、または弱化した。対比がはっきりして、観客にわかりやすく人物間の関係を伝えたといえる。そして、場面の追加等によって、登場人物の緩やかな心の動きを的確に表現した。このため、「夫婦交換」という珍しい題材でも、二組の夫婦の離婚・結婚が自然に描かれており、観客に不自然な印象は与えない。しかし、主要な人物の性格や主題等が大きく変化したわけではない。小説の魅力をそのまま観客に伝え、そして「鷄窩窪の人家」への理解を深めたといえるだろう。

烟峰と麦絨は対照的に描かれているが、どちらも強さを持っている。二人とも周囲に振り回されず、自分の信じた道を突き進む性格である。また、彼女たちの強さは周りへもいい影響を与え、当時の農村を変えていく原動力となったと思われる。この農村女性の力強さに、賈平凹の考える「ルーツ探し」があるのではないかと考えられる。彼は「ルーツ探し」を作品の根底に置き、「『ルーツ探し』は一種の復古や後退ではなく、自立し自分を強くするために必要なものである。」とした。故郷の農村を書いて後進性を突きつけ、しかし決してその後進性が劣っていると考えるのではなく、それによって対する「先進性」を覆す思想を持つ。賈平凹は、奇抜な題材を通じ、変革の波を受けている農村に生きる強い女性像を伝えた。そして、既成の道徳観念を覆すと同時に、彼が生きた農村の力強さを知らしめることに成功したといえる。

17世紀の日記から見る両班の葬祭儀式

一 忌日と名節の四代奉祀を中心に

金子 綾乃

朝鮮時代に官僚階層を席卷していた両班は「奉祭祀、接賓客」を生活信条として重視した。本稿では、17世紀に光山金氏24代一金鈴が40年に渡り私生活を記録し、祭祀や賓客についての記述が特に多い『溪巖日録』に書かれている事例を取り上げて、17世紀の両班がどのようにして忌祭・名節・四時祭を執り行ったのかを見ていく。

まず二章では史料として使用する『溪巖日録』と、その著者である金鈴の紹介をする。史料として使用する『溪巖日録』は金鈴が1603年～1641年にわたりほぼ毎日書いた日記である。筆者である金鈴は1577年8月10日（陰暦）、漢陽の鑄字洞で生まれ、鈴の本貫は光山、字は子峻、号は溪巖である。父は1577年当時朝廷に仕えていた富倫、母は平山申氏である。

三章では忌日祭祀について検討した。祭祀は直系男子が4代祖分の祭祀を代表となっておりおこなうものであるが、17世紀は親族内で祭祀を持ち回りで行う輪回方式がとられていた。このため、輪回の持ち回り範囲・参加者は鈴を含め各先祖の4代孫内の男子であった。また、4代祖内の祭祀を行なうが、これは父系先祖に限ったものではなく、必要があれば外家の先祖への祭祀も行っていることがわかった。また、女性は祭主の都合によって代行を務めていたため、条件つきでの参加が許されていたようである。

四章では、名節に行われる祭祀について考察した。名節の祭祀も4代祖と外家を対象に祭祀を行っており、4代祖の祭祀は輪回で行われ、祭祀は持ちまわり範囲・参加者は各先祖の4代孫内にあたる人間で構成されていた。忌日祭祀に参加していた女性の姿は日記からは確認できなかった。

五章では四時祭について検討した。2・5・8・11月の吉日に高祖以下を祭る「四時祭」は別名「時祭」「時亨」とも言われる。一方、3月上旬に5代以上の祖先を祭る「墓祭」「墓祀」という祭祀もあり、この祭祀も別名「時祭」「時亨」と言われる。日記を見ても、双方の祭祀は混同されているようで、3月上旬の「墓祭」は父母や曾祖父母を対象としており、5月の「墓祭」と8月の「墓祭」は名節の祭祀を行っていると思われる。各祭祀を明確に認識していなかったようである。

17世紀に書かれた『溪巖日録』から、禮安居住の光山金氏は、4代祖の祭祀を4代孫内の男子で輪回して祭祀を行ない、参加者も4代孫内の男子であった。また、必要があれば外家の祭祀も行っていたが、光山金氏が行なったというよりも、金鈴に限って見られると思われる。女性も祭主の都合によって祭祀へ参加していた。四時祭は、祭祀の趣旨を明確に認識していなかった。

このように、変化過程にある時代であるため、輪回が行なわれ、女性が条件付で参加することが容認されていた。

韓国高等学校国史教科書の変遷

—第2次教育課程教科書と第3次教育課程教科書の近代以降の記述を中心に—

河合 望

本論文では、韓国の高等学校において使用される国史教科書を各教育課程（米軍政期から第7次教育課程）に着目しながら、特に第2次教育課程期と、第3次教育課程期のものに重点を置いて、その構成や記述の変遷を明らかにしていくことを課題とした。韓国の「国史」教育は1945年の解放以来、国政や国策の一部として重視され、様々な変化をとげてきた。その中で第2次教育課程から第3次教育課程に変わる時に、国史の教科書は検定教科書から「国定」教科書に変わった。この際の変化を明らかにしようとするものである。

第1章では、韓国の教育の根幹をなす教育課程と教科書制度について、先行研究をもとに確認していった。

第2章では、第2次教育課程教科書と第3次教育課程教科書の、構成比較と記述内容について、それぞれの教科書を訳しながら、比較を行った。

以上の検討から、「国籍ある教育」をどのように実現しようとし、その結果どのような記述が行われているかということについて第3次教育課程教科書は、韓国を主体とした肯定的な歴史を描こうとしている。特に、自発的な運動や改革、戦いなどにその傾向をみることが出来る。また、第3次教育課程で充実している記述には、列強の支配に対する国民の闘争の具体的な描写がある。高宗の強制退位や軍隊の解散によって起こった民心の爆発でゲリラ戦や侍衛隊がつくられたことが記述されている。6・25の朝鮮戦争でもこの傾向は見られる。いかに悲惨な被害があったかを強調することでしか描けない歴史では、国民の自負心は育たないであろう。しかし、第2次教育課程教科書では6・25までの朝鮮半島の北と南の対立を描く際に北韓の政権をソ連

の「傀儡政権」と断言していることや、東学農民蜂起で国民が立ち上がるまでを、被害を強調して記述していること、前に述べた甲申事変の記述などからも被支配者、他律的な政治を描く形になってしまっていた。列強の思惑に大きく左右されながら展開していくのが朝鮮半島の歴史かも知れない。植民地支配のもとで日本から植え付けられた植民地史観を乗り越えようという姿勢が色濃い昨今も、これは認めざるを得ない。しかし、事実を自虐的な歴史で描くのではなく難局に対峙した時に、国民が感じ行動したことを自国を主体とした文章で書こうという姿勢が大切なのは事実である。なぜなら韓国の「国史」は日本史でも中国史でもなく、韓国史だからである。

哈爾濱日本人居留民社会の成立とその歴史

木村 歩美

中国黒龍江省の省都・哈爾濱は、その歴史を辿ってみると、1898年からの帝政ロシア支配、1920年代からの中華民国支配、そして1930年代の日本支配（満州国時代）を経て、戦後はまた中国の都市へと戻るといふ、非常に複雑な歴史であることが分かる。このような特殊な歴史の中で、哈爾濱ではロシア人・中国人をはじめとした多くの外国人居留民たちがひとつの街で暮らしてきた。本論文では、これら外国人居留民の中で、日本人居留民とその社会に注目し、彼らが哈爾濱にやってきた理由や、その暮らしぶり、居留民団体の成立や発展の様子を検討した。資料は、主に雑誌『セーヴェル』等に記載された当時の回想録や、アジア歴史資料センターの外交資料、当時の新聞記事を用いた。

第一章では、哈爾濱都市建設がスタートした1988年から、1900年ごろまでの哈爾濱草創期の様子と、日本人居留民社会の成立過程についてみた。ロシアによる東清鉄道建設の開始によって、草創期の哈爾濱には多くのロシア人鉄道関係者が居住したが、そのなかで日本人居留民は、ロシア人を相手に雑貨や食料品を扱う店を開き、哈爾濱での生活を始めた。ロシアが行政権を行使していたため、居留民たちはロシア政府との交渉を目的に「松花会」を設立した。

第二章では、1900年代から1920年代の様子について検討した。1907年に哈爾濱にも税関が設置されたことによって、哈爾濱における商業活動はより活発なものとなり、外国人居留民の数は急激に増加して、街には数十カ国の大使館が立ち並んだ。日本人も商業活動を目的に家族で哈爾濱へ移住するようになり、居留民社会の拡大とともに「日本人居留民会」の設立や日本人学校の建設などが行わ

れた。第一次世界大戦とロシア革命後に哈爾濱でのロシア勢力が衰退すると、中国側が自治権を回復し、1920年代は中華民国支配となったが、ロシア人社会の中で築き上げてきた日本人の経済基盤もこれによって大きく揺らぐことになった。

第三章は、1930年代からの満州国時代と、終戦後の日本人引き揚げの様子について検討した。1932年以降、哈爾濱も満州国の一都市となったが、居留民たちの生活に大きな変化が見られたのは1935年の北鉄接收後である。ロシアが建設した東清鉄道の権利を日本が買収したことによってロシア人鉄道関係者が一度に引き揚げ、代わりに大量の日本人が入哈した。日本人居留民社会は急激な拡大を見せたが、一方でかつての「国際都市・哈爾濱」は失われていった。終戦後は中国共産党軍が哈爾濱へ入城し、約8万人の日本人を対象に引き揚げを行った。

哈爾濱における日本人居留民社会の発展について以上のように考察した。特に経済状況については、ロシア経済・中国経済は居留民の生活に大きく影響したが、居留民たちは変化のたびに柔軟に対応し、他の外国人居留民と交わり合いながらその勢力を徐々に拡大させていった様子を伺うことができた。

植民地期朝鮮における官僚の試験任用

一文官普通試験の試験制度と最終合格者の分析を中心に―

齋藤 大志

本稿では、植民地期朝鮮における、文官任用令に基づいて行われた判任官の試験任用制度である、文官普通試験を対象を絞って、それが持つ性格について、文官普通試験の試験制度や最終合格者といった観点から分析、考察した。史料として、『朝鮮総督府官報』の文官普通試験に関わる記事をメインに、当時の受験雑誌としての性格を持つ、『受験界』や『朝鮮行政』を用いた。

第一章では、官僚の試験任用制度の変遷がいかなる経緯を辿ってきたかということに関して、各種先行研究に依りながら概観した。

第二章では、判任官の資格を得る試験である文官普通試験について焦点を当て、植民地期朝鮮における文官普通試験自体が持つ性格とはいかなるものであったかについて分析した。第一節では文官普通試験の試験制度の側面から分析を行い、さらにその変遷についてより明確にするため、当時的高级行政官僚を目指すための試験であった、文官高等試験行政科の本試験の試験科目と比較して考えた。この節では、朝鮮における文官普通試験は、内地人を対象に朝鮮語が課されていた特徴が見られたこと、文官普通試験の出題傾向から朝鮮に関する知識が問われていたことから、受験生に対し朝鮮に関する知識があることを前提とした試験であり、朝鮮総督府やその所属官庁に就職したいと考えている受験生を採用するための試験であったということが考えられた。第二節においては文官普通試験の最終試験である、口述試験を合格した最終合格者の側面から分析した。文官普通試験が実施された1919（大正8）年から1943（昭和18）年までの期間における最終合格者の推移について、文官高等試験行政科と比較して考えると、朝鮮における文官普通試験は1919（大正

8）年の開始当初から朝鮮人の最終合格者が存在し、1930年代の中ごろから、朝鮮人の最終合格者の割合のほうが日本人の割合よりも高くなっていったことから、朝鮮人にとって最終合格しやすい試験であったことが推測できた。加えて、文官普通試験最終合格者の詳細について、身分、本籍地、受験地の3つの観点から分析したところ、日本海を越えて朝鮮半島で受験した日本人も存在していたなどといったことについて推測できた。

以上のことから総合的に考えると、植民地期朝鮮における文官普通試験が持つ性格について、朝鮮総督府やその所属官庁に就職したいと考えている受験生、特に朝鮮人の受験生にとって、難関の試験である文官高等試験行政科よりも大きなチャンスが与えられていたという意味において貴重な試験であり、当時の日本人の受験生にとっては、はるばる日本海を越えて朝鮮半島で受験するほどの価値を持っていたということが考えられた。

白朗作品研究

—1936年—1940年を中心として—

佐藤 由香

白朗(1912～1994)は中国現代文学史上、東北作家の一人に数えられる作家である。本論文では、白朗が1936年—1940年に書いた抗日をテーマにした6作品(「伊瓦魯河畔」、「輪下」、「生与死」、「一個奇怪的吻」、「清償」、「老夫妻」)を扱い、これらの作品の特徴を明らかにすることを目的とした。

第二章では登場人物の死について考察した。各作品には話の最後に登場人物の死が描かれる。「伊瓦魯河畔」では抗日闘争の敵側の死が描かれるが、それ以後の作品では抗日闘争をする側の死が描かれ、「生与死」以後は話の主人公の死が描かれる。これは白朗が抗日の闘争者の死を描くことを重視するようになったからであると思われる。本章では、各作品の死んだ登場人物とその死の場面を詳しく見たことで明らかになったことを示し、さらに白朗がなぜ抗日の闘争者の死を描くことを重視するようになったのかを考察した。白朗が抗日をテーマにした作品を発表する動機は、読者に抗日意識を喚起させるためである。このことから、白朗が抗日の闘争者の死を描くことを重視するようになったのも、読者に抗日意識を喚起させる作品を作るためであると思われる。そのためには、日本人侵略者の残虐さを伝える以外にも、手本となる理想的な抗日の闘争者を作中に描く必要があり、白朗にとってはそれが抗日のために命を犠牲にする人だったのではないだろうか。当時の人々の意識では抗日のために死ぬことは光栄なことであり、壮烈な最期を遂げた人は英雄になった。そのため、白朗は抗日の闘争者の死を描くことで、読者の抗日意識を呼び起こし、抗日闘争への参加を訴えたのであろう。

第三章では黎明(夜明け)の描写について考察した。白朗の作品は自然描写が豊かである

が、その中でも黎明(夜明け)に関する描写は、話の重要なところで意図的に描かれていると思われる。白朗は日本に侵略された中国の状態を「夜」と表現していることから、黎明(夜明け)の描写は中国がいずれ日本に勝利することを暗示するように挿入されていると考えられることもできる。

白朗が1936年—1940年の間に創作した作品はみな時代に影響されて、抗日がテーマである。白朗はこれらの作品に自分の愛国心と日本帝国主義に対する強い反感を込めながら、多くの抗日の闘争者を描いた。第二章の考察から、白朗は理想的な抗日の闘争者を描くことを目的としていたことが明らかになったことで、白朗の作品は主人公に理想を追い求める傾向が強いという特徴があるといえる。本論文で扱った作品から10年以上後に発表された、代表作とされる『為了幸福的明天』(1951年)は、主人公の女工が片腕を事故で失いながらも党の教育の下で模範的な共産党員に成長して工員を感化していく話であり、白朗がこの主人公の女工にも党員としての理想を追い求めていたことをうかがうことができる。

阿城「棋王」について

佐藤 有美

「棋王」は、阿城（1949年～）が1984年に発表した中編小説である。1985年に発表された「樹王」と「孩子王」を合わせて「三王」と称されている。文革の悲惨さを強調することなく、ありのままを淡々とした筆致で描いたことによって、時代の「異常さ」を際立たせ、異色作として世間に受け止められ、中国国内に加え、日本・アメリカでも高く評価された。農村などの生活の中に根づいた伝統文化及び、思想や生活の術を重視し、その中に理想を追い求める作風から、阿城は「尋根文学」作家の代表的人物と言われている。

第一章では、阿城の経歴と「棋王」のあらすじをまとめた。

第二章では、作品の中で描かれている多くの「大人」たちから、主人公と接点があり筆者が重要性を感じた6人を取り上げて、それぞれの行動や台詞から考察し、作者が伝えたかったことを探った。

「王一生の象棋を見こみ、彼と共に各地を渡り歩いた男」からは、貧しい人間はまともに象棋の世界にすら身を置くことさえできない時代の異常さが、「王一生のクラスメートの父で有名な棋士」からは、中国社会に象棋を本当に理解している人が少ないことが示されていた。「紙くず拾いの老人」からは、象棋には中国思想が秘められていて中国民族の生きる基盤を養うものだと示されていた。同時に、その基盤が失われた中で生きていくことの不安が描かれていた。「王一生の母」からは、衣食を確保するのに追われ通して、伝統文化の必要性を最後まで知ることのできなかつた、経済的に貧しい下層民の姿が、「文教書記」からは、根本的に伝統文化を守るとしない人物が見て取れた。「画家」からは、直接生活を営むことに通じないものが人間に充実感や喜び

を与えていることが示されていた。

このように、作品中の「大人」たちの中国社会と伝統文化に対する態度が見え、そして、物質的な生産を追求し伝統文化が疎外された当時の中国社会が描かれていたことが明らかになった。

「棋王」では、中国社会と伝統文化に対して様々な価値観を持った「大人」たちが描かれていたのだが、主人公王一生は彼らをただ受動的に受け入れるのではなく、自分の意志を貫き、生きる上での象棋の重要性を見出している。つまり、中国の現状がどうであれ、王一生のように強く追及することで、伝統文化を掘り起こすことは可能なのだという希望が示されていると考えた。「棋王」の中であえて多くの大人を登場させたのは、以上の意図があったと捉えることが出来た。

植民地期朝鮮女性雑誌から見る恋愛・結婚観

志賀 裕子

1919年の3・1独立運動を契機に、朝鮮植民地体制は武断政治から文化政治に転換され、朝鮮において言論・出版の取り締まりが緩和された。これにより女性雑誌が刊行され、女子教育・恋愛・結婚・職業問題など女性に関する様々な問題が取り上げられるようになった。当時、これらの女性問題の社会化に拍車をかけたのが新女性と呼ばれる人々であった。彼女らは近代教育や東京留学を通して、既存の家父長的な秩序や伝統的な男女関係に疑問を抱き、平等に根ざした新しい男女関係の構築を目指した。本論文では、これら新女性に広く影響を与えたとされる女性雑誌から当時の恋愛・結婚観について考察した。史料としては植民地期に朝鮮で出版された『新女子』、『新女性』、『新家庭』、『女性』を使用した。

第一章では、1920～30年代の恋愛結婚観を自由主義と社会主義の観点から考察した。女性雑誌の記事は大きく自由恋愛・結婚思想者と社会主義的恋愛・結婚思想者に分けることができた。前者は、強制婚や門閥婚を否定し、個人の意思による恋愛に基づく結婚観を普及させようとした。一方、後者は社会主義のもとで男女の上下関係や女性の搾取は解放されると考えており、女性も労働することで対等な恋愛・結婚をすることを主張した。

第二章では、結婚をめぐる諸問題として離婚・早婚・儀式問題についてまとめた。離婚に関しては、女性が契約関係に固執することで夫婦関係が悪化するという問題を指摘し、自由離婚を主張した。また、女性自身が離婚する権利を持つことを自覚するよう指摘していた。法的にも女性から離婚を請求できる権利を認めるなどの処置がなされたが、旧制度の影響で女性からは離婚しにくい状況であった。早婚に関しては、法廷婚姻年齢未満で親に

より強制的に結婚させられることを嘆き、その改善を訴える記事が多かった。結婚儀式は、「西洋は年収の3割、朝鮮は年収の3倍」といわれるほど派手な儀式が流行していた。それにより破綻する夫婦が増加していたため、儀式を簡略化し、実生活に見合ったものにするべきとしていた。また、儀式よりも夫婦間に愛があること、法的手続きをとることを重要視した人は儀式の廃止を訴えたりもした。

第三章では、女性雑誌の主な読者であった新女性の実際の意見をまとめた。1920年代の新女性の理想の夫としては男女同等権を認める人や、妻の意見を尊重する人という意見が多かった。しかし、1930年代に入ると、このような男女平等の意見はみられなくなった。ここから新女性の妥協を読み取った。

第四章では、女性雑誌が新女性に与えた影響をこれまでの考察事項をふまえ、新たに再考した。女性雑誌は近代的な新知識を社会に普及させ、新女性を叱咤激励する役割を果たした。また、読者の投稿欄の設立や座談会の開催など、新女性の議論の場を提供した。

以上のように、女性雑誌は読者である新女性と深く関わりながら近代的な恋愛・結婚観を主張していた。しかし、雑誌が発行されていた1920～30年代は植民地期であると同時に近代初期であったため、実際は様々な問題があり、雑誌の主張していた近代的な恋愛・結婚観とは隔たりがあった。ゆえに、当時の恋愛・結婚観は過渡的なものであったといえる。

葉紫研究

新井田 香

葉紫（1910-1939）が創作活動に至ったのは、自らが経験した世の中への不満や怒りを発散するためであった。葉紫は、1926年に湖南省で起こった農民運動で父と姉を国民党に殺され、それから長江中流域で流浪生活を送り、1930年に上海に至り創作活動を行った後、1939年にわずか29歳で病死している。その生涯は、魯迅によって「太平天下のおとなしい人の一世紀分の経歴に匹敵する」と評されるほど波乱に満ちたものであった。本論文では、葉紫が主に取り上げたテーマである、農民が地主の搾取に立ち向う過程を描いた作品と、共産党主導の革命を描いた作品を取り上げ、それらの作品の主題と特徴を明らかにした。

第二章では、葉紫の代表作である「豊収」とその続編である「火」を取り上げ、主人公である曹雲普と立秋の農民の親子について考察した。農作業と、その成果である農作物の収穫に対するきわめて深い愛着は、両者共通している。共通の基盤を持ちながらも、「豊収」では曹雲普は租税を軽減してもらうために地主に哀願し、立秋は地主への反抗計画を立てるという別々の方法で地主に対応していく。しかし、「火」では曹雲普も立秋の考え方に賛同する。そこには、自分たちの生活が守られないことが明らかになれば、曹雲普のような老農民であっても反抗に立ち上がるべきである、という作者の願望が込められていると考えた。次に、「豊収」、「火」の描写を取り上げ、葉紫が農村を舞台にした作品を描くにあたって工夫している点について考えた。作中では、清明節、啓蟄、立春、春分、中秋節など二十四節気に関する語句が多用され、それらによって季節の変化を表現している。さらに、天候の変化と、それに一喜一憂する農

民たちの姿も描いている。そのような描写によって、農作業と自然との密接な関係を伝えている。また、農民たちが天候に恵まれるために、神様に祈祷する様子や、運勢を占う様子も数多く登場している。それらの描写によって、農村での生活の様子をより鮮明に浮かびあがらせることに成功していると考えた。

第三章では、中編小説「星」を取り上げ、登場人物の共通点と、タイトル「星」とは何を示すのかを考えた上で、この作品の主題を明らかにした。「星」という作品は、作中の登場人物を社会に虐げられる人物として描き、世の中の狂気を暴きだすとともに、そのような世の中を変えるためには梅春姐のように革命に立ちあがる必要があるということを訴えていると結論付けた。

葉紫は農村の無残さと貧困、さらに農民が血生臭い革命に飛び込んで勝利を手に入れるために立ちあがる様子を描いた。彼の革命に対する激情と信念は、作中に旧社会の滅亡の必然性として反映されている。また、葉紫は自身が体験した社会への不満や怒りだけではなく、そこから得た教訓も作品の中に込めて、読者に圧迫者に対して立ちあがることの必要性を説いている。そうした彼の作品は、読者を激怒させるだけではなく、同時に読者を鼓舞する力も持ち合わせている。

黄炎培の政治的活動について

—職業教育活動からの変遷を中心に—

原 里佳子

【構成】

はじめに

第1章 1878～1930年の黄炎培の活動

第1節 黄炎培と職業教育の開始

第2節 1920年代の言論活動から見る

黄炎培—『生活』誌より

第2章 1931年以降の黄炎培の活動

第1節 1930年代以降の教育活動—中

華職業教育社の変化

第2節 1930年代前半の社会活動—上

海市民地方維持会を拠点として

第3節 1930年代後半の政治活動—民

主同盟・民主建国会を中心に

おわりに

参考文献

【要旨】

清末から中華民国初期にかけて、中国は日本やアメリカをモデルとして、近代的な教育の普及を試みてきた。この近代的な教育の1つである職業教育を、提唱・推進した人物として黄炎培（1878～1965）を挙げることができる。黄炎培は、1917年に中華職業教育社と中華職業学校を創設し、職業教育の指導者として教育界に大きな影響力を持っていた。また、1930年代後半から民主同盟や民主建国会の重鎮となった人物でもある。このような教育家としての黄炎培や政治家としての黄炎培については多くの先行研究があるが、それぞれの黄炎培像は分裂した姿で描き出されており、黄炎培を部分的・断片的にしか捉えることができなかつた。

そこで本論文では、1930年代前半の黄炎培の活動を詳細に辿った。黄炎培は1931年の満州事変勃発以降、抗日活動に取り組んでいた。その活動の拠点となっていたのが、上海

市民地方維持会や浦東同郷会、中華職業教育社であった。具体的な活動内容は、国産品の購入を勧める「国貨運動」の推進や、閩北平民教養院と淞滬記念広慈院での難民救済・教育活動、農村改進黨、出版物による抗日の呼びかけなど、より民衆に深く根ざした社会活動であったとすることができる。また、黄炎培はこれらの活動を、上海という地域と強く結びついて行っていた。

つまり、黄炎培は1930年以降、職業教育活動から政治活動へと急旋回したのではなく、職業教育活動の経験を土台として、地元・上海に深く根を下ろして社会活動を行い、次第に政治活動にも取り組んでいったとすることができる。このように黄炎培の教育活動・社会活動・政治活動には、共通性・連続性を見いだすことができるのである。

福島県送出の満州開拓移民

松本 理沙

福島県は、満州移民送出数が全国3位（約12,700名）であり、この数字は、同県が日本の満州移民事業に大いに関わったことを意味している。しかし、同県の満州移民について体系的にまとめた研究は、私見の限り見られない。本稿の課題は、福島県における満州移民事業の展開について、史料を元に事実検討を行い、その全体像を明らかにすることである。

第一章では、満州移民の概略を時系列に沿って検討し、その中で移民政策や法律、移民関係機関の役割についても触れた。また、開拓団の送出方法や種類を10個に分類し、それぞれに考察を加えた。

第二章では、福島県の市町村刊行の地方史や、そこに所収されている史料、また当時の新聞記事や回想録から、満州移民に関するものをピックアップし、同県における移民事業の展開を明確にしていった。福島県では、養蚕業の衰退と冷害・凶作の発生→慢性的な農村恐慌、小作農の増加→耕地不足問題と小作争議頻発、経済更生計画の一環として満州移民が推進された。日本政府→福島県→地方事務所→市町村→地域有力者→市町村民という順で移民計画が伝播、また移民希望者は誓約書を提出し、「福島県満州開拓訓練所」にて1ヶ月間訓練、その後新潟港を經由して満州へ渡った。県は「送出番付」等を作成、各市町村に対しさらなる移民送出を煽っていた。1932～36年は試験移民期、1937～40年が最盛期、1939年からは分郷移民が主軸となる。1942年以降は主な移民対象が青少年に移行、食糧増産のために報国農場を建設した。終戦後は特徴的な引揚げをした例（現地越冬、炭坑越冬等）もあるが、多くの開拓団は都市部へ移動、劣悪な衛生状況により死亡者が多発した。

第三章では、福島県が送出した最大の集団開拓団である、第七次北学田開拓団における事実検討と考察を行った。同団の入植初期の営農は劣悪であり、労賃高騰問題から大赤字であったが、1940年の北海道農法導入により営農状況は劇的に改善した。これが、満州の全開拓団に北海道農法を広める足がかりとなった。引揚げ時には周辺の開拓団員と共に、真冬の中チチハルへ移動したが、食糧不足や疫病等により団員の半数以上が死亡した。

第四章では、福島県送出の分郷開拓団である、第九次太平開拓団・呉山開拓団における事実検討と考察を行った。送出元の伊達郡は、福島県内で最も小作争議が頻発しており、町村長会は小作農に分郷移民という道を示し、小作争議から目を逸らさせようとした。両団の送出元は、県内でも毎年トップクラスの送出数を維持し、団の営農も順調、呉山開拓団内には報国農場が建設された。終戦後の両団は、周辺の開拓団と共に現地で越冬した。栄養失調や発疹チフス等で多くの死亡者を出したほか、残留孤児や残留夫人を生み出した。

今回、満州移民の全体像に関する先行研究と、福島県内の地方史や史料、回想録等を同時に用いることで、同県送出の満州移民について多角的に分析し、その実態をある程度再構築することができた。福島県送出の満州移民は、現在まで県内においてもあまり取り上げられず、体系化もされていないが、日本の移民政策に大いに影響を与えたことが分かった。日本の満州移民事業を再考する上で、福島県送出の満州移民は、重要な研究対象となるのではないだろうか。

北魏における廃仏について

—魏収の視点から—

吉田 衣里

中国は歴史上、北魏太武帝の廃仏、北周武帝の廃仏、唐武宗の廃仏、五代後周の世宗の廃仏という、四度の大きな「廃仏」が起こっている。これらは「三武一宗の法難」と総称されており、それぞれ内容も規模も大きく異なっている。本論文ではこの中でも太平真君7年(446)から7年間に渡って行なわれたとされる北魏太武帝による廃仏事件を扱った。そして、『魏書』『積老志』を記した魏収の伝を見た上で、彼の立場や経歴が「廃仏」を書くにあたってどのように影響を与えたかということについて考察を行った。

第一章では、北魏の廃仏について、まず「積老志」に記された廃仏の経緯を追い、仏教制度及び当時の状況、南朝との性格の違い、地域間の差、他の廃仏との性格の違いなど北魏仏教を述べる上で触れておくべき要素についてまとめた。

第二章では魏収の生涯を追い、また、『魏書』が成立した当時、その評判があまり良くなかったことについて、『穢史』の魏収の伝から、実際どのようなかを見ていった。

第三章では魏収と仏教の関係についてより詳しく見、彼の家庭に仏教の文化が浸透していたことに触れた。また、共に漢人官僚であった崔浩と魏収を比較することによって、魏収がどのような立場であったのかを明確にした。彼らは有能でプライドが高く、文に秀でているところが共通している一方で、仏教の捉え方が全く異なっていた。これらのことは彼らの育った環境や時代背景に拠るところが大きいと考えられる。

本論文では、廃仏の詔書の視点が中華的な考え方に基づいていることに着目し、崔浩が北魏廃仏において重要な役割を果たし、太武

帝に対しても多大な影響を与えたと結論付けた。このことから塚本説や佐藤説の、「漢人官僚である崔浩が北魏廃仏の中心人物である」という説を支持した。また、恭宗が早死にし、太武帝もまた殺されるという最後を迎えたことを魏収が「積老志」に記さなかったのは、奉仏一家に生まれた魏収が「仏教は皇帝に対してあだなすものである」という文脈になることを避ける為に敢えて省いたのではないかと推測した。これらのことから、魏収が仏教に対して肯定的態度を示しており、仏教を擁護する立場にあったとした。また魏収は「積老志」を拓跋政権下の仏教のあり方への批判で結んでいるが、これは『魏書』が記された当時の、北齊仏教教団による栄達への苦言も含まれていたのではないかと推測される。このように、魏収は仏教に対して素養と関心を持っており、『魏書』を著す際にもそのことが多分に発揮されていた。